



## 難聴ってなに?

どんな  
病気?

外耳炎などの病気や老化がおもな原因で、聴力が低下した状態のこと。老化に伴う中耳や内耳の機能低下が原因となり、人と同じように、シニアになると聴力の低下が起きます。また、外耳炎や中耳炎、内耳炎などが原因で、音を伝えたり、感じたりする部位に炎症が起きることや、膿や液体がたまることで、聞こえに影響が出るケース(この場合、若い犬でも難聴になること)もあります。そのほか、ホルモンの病気や脳の病気が聴力低下の原因にも。一方、毛の色を決める遺伝子が関係し、生まれつき両耳の聴力がない先天性難聴もあります。

## 原因

老化や病気が関係する後天性難聴と、  
遺伝による先天性難聴があります

## 後天性難聴

代表的な原因は、老化に伴う中耳や内耳の機能低下や外耳炎といった耳の病気です。音の通り道のどこかに異常を起こすことが原因と考えられます。

## 主な原因

- 老化による中耳や内耳の機能低下
- 中毒
- 外耳炎／中耳炎／内耳炎
- アミノグリコシド系抗生物質などの副作用
- 甲状腺機能低下症
- 脳炎／脳腫瘍 など

## 先天性難聴

マール遺伝子(ブルーマールの被毛)やパイボールド遺伝子(まだら模様)との関連が指摘され、以下の犬種でその遺伝子をもつ犬に見られる場合があります。

## 主な原因

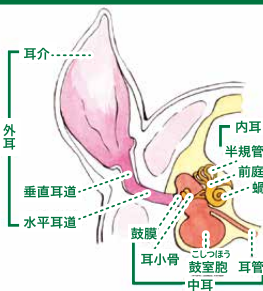
## 主な犬種

- 遺伝
- シェットランド・シープドッグ
- ミニチュア・ダックスフンド
- ダルメシアン
- イングリッシュ・セター など

## 耳の仕組みと難聴

音の通り道のどこかに  
異常が起きると難聴に

耳介で集められた音は、耳道を伝わり、鼓膜を振動させます。振動が耳小骨から内耳へと伝わり、内耳で電気信号に変換。電気信号が蝸牛神経から脳に送られ、音として認識されるのです。この音の通り道のどこかに異常があると、聴力の低下が起こります。



## 症状

声や音への反応が悪く、臆病になる犬も。難聴が片耳だけでは気づくのは難しく、両耳の難聴が進行してはじめて気付く場合が多いです。

## 声や音への反応

- 名前を呼んだり、「ゴハンだよ」と言ったりしても、耳すら動かさず反応しない
- 眠っているときに大きな音がしても起きない など

## 様子の変化

- 急に近づいたり、触ったりすると驚いたり、噛んだりする
- キュンキュンとずっと鳴いて不安そうに見える
- 動くのを嫌がる など



## 先天性難聴では

- しつけがうまくいかない
- 教えても覚えられないなどで気づくことも

検査と  
治療法

犬の難聴の診断は難しく、聞こえないことを確定する方法はありません。原因追究のために、身体検査や耳鏡検査などを行い、疑われる病気によっては、CT検査やMRI検査、ホルモン検査なども行います。先天性難聴と老化による難聴では、聴力を回復する治療法はありませんが、外耳炎や中耳炎、内耳炎、甲状腺機能低下症、脳炎、脳腫瘍などの病気が原因の場合は、原因の病気を治療することで聴力が回復することも。難聴の原因のなかで、予防できるのは外耳炎です。耳をかゆがるのは普通のことだとそのままにせず、早めに受診しましょう。



いぬに多い病気、そこが知りたい! は「いぬのきもち」で連載中!

●こちらは、掲載した記事を再編集したものです。

アニコム損保ご契約者が  
マイページから定期購読を申込みと  
**2号(2ヶ月分)無料!!**

いぬのきもち  
春  
病気と暮らし